

世田谷文学館 ニュース

SETAGAYA LITERARY MUSEUM

館長の作家対談

松浦寿輝（詩人・小説家・フランス文学者）



ミロコマチコ《ネギ畑のミルクとシマ》2016年

収蔵品のご紹介 〈日本SFの父〉海野十三が設計した「秘密の書斎」(「新青年」1938年12月号)
「セタブンマーケット 2017」開催報告

館長の作家対談

ゲスト
松浦寿輝
(詩人・小説家・フランス文学者)

聞き手
菅野昭正
(世田谷文学館館長)

詩、小説、評論とさまざまな分野で活躍し、このたび1930年代後半の上海を舞台にした小説『名誉と恍惚』でも谷崎潤一郎賞、Bunkamuraドゥマゴ文学賞のダブル受賞を果たした松浦寿輝さんをお迎えし、当館館長がお話を伺いました。

『名誉と恍惚』

菅野▼今日はお忙しいところありがとうございます。『名誉と恍惚』を拝見しました。とても読みごたえがありました。

松浦▼こんなに厚い本を読んでくださって、ありがとうございます。

菅野▼これを拝見して、作者が上海を舞台にしたということが意外というか、驚きでもありました。小説の舞台として上海を手がけている作家はかなり多いですね。横光利一とか、終戦前後に堀田善衛さんがやっていたよね。そういう作家たちの上海に対する関心とは、自ずから違っているはずだと思うけど、何か特別なきっかけがあったんですか。

松浦▼ちよつと観光旅行に行ったことがある程度で、ほとんど実人生では縁のない街なんですけれども。今や上海も現代建築の実験場なんていわれる浦東あたりはよきによき奇怪な形のビル

が建ち並んでいます。にぎやかな街から裏道に逸れると床屋が路上にいて客を集めて丸椅子に座らせて髪を切っていたり、人間くさいところもあつたりして楽しかったです。

ただ、そういう体験よりもむしろ先生が仰つたように、今まで扱われてきた文学の中のの上海。もつと俗な次元でも上海神話みたいなものが、映画なども含めてありますよね。エロスと暴力であるとか、麻薬と売春であるとか。英語ではMore of the East、「東洋の娼婦」とか呼ばれたりした。一種のオリエンタリズム幻想みたいなものも含めて、いろいろな固定観念や誇張したイメージがまわりついているところがまず面白いと思つたんです。そういうものを利用しながら、何か長い物語の舞台にできないかなというあたりが出発点でした。

菅野▼僕が今まで読んだ上海の小説では、例えば横光利一は謳い文句として「数量と悲惨」ということを言うんですね。巨大な都市であり、悲惨を極めた生活をしている人たちがいるという前提、枠組みで都市を書くこととしたわけですね。結論から言うと、あれは失敗作だと思いますけど。横光はあれこれ新しがつて関心をもち、誰もやっていないことをやりたいというタイプの作家でしたから、そこで五三〇事件のときの様々ないきさつ

を、時間を移し替えて書いていますね。彼が上海に行ったのは1928年かな。

松浦▼昭和3年ですね。あれは横光の最初の長編ですね。

菅野▼五三〇はその3年前。あれは日本資本の紡績工場のストライキが発端だったわけですね。その中でいろいろ悪戦苦闘した人物を移し替えて、五三〇をひな形にしたフィクションを作つた。どうしてもそこに無理があるし、テーゼとして掲げた数量と悲惨という問題が、うまくマッチしていない感じがするんですね。数量、要するに巨大なマスの都市、その巨大なマスを捉えるということとはなかなか難しい作業ですね。当時の日本の小説の一般的な規範からすれば、非常に難しい課題だったでしょうね。悲慘を書くというのは、それほど難しくはなかったと思いますけど。あれはお読みになりましたか？

松浦▼はい、読みました。先生の『横光利一』は横光の作品が日本の近代史の中で持つ意味を解明した、素晴らしい評論でした。それはともかく、魔都上海と言いますけど……

菅野▼魔の都ね。

松浦▼魔の都。あれは村松梢風が発明した言葉のようですね。『魔都』という小説を彼が大正13年に書いて、一挙に人口に膾炙(かいしや)したらしい。谷崎も



松浦寿輝(まつうら・ひさき)

詩人・小説家・フランス文学者。東京大学名誉教授。1954年東京都生まれ。東京大学大学院仏語仏文学専攻修士課程修了。パリ第三大学にて博士号(文学)、東京大学にて博士号(学術)取得。'88年、詩集『冬の本』で高見順賞、'95年、『エッフェル塔試論』で吉田秀和賞、'96年、『折口信夫論』で三島由紀夫賞、2000年、『知の庭園—19世紀パリの空間装置』で芸術選奨文部大臣賞、同年、『花腐し』で芥川龍之介賞、'05年、『あやめ 蝶 ひかがみ』で木山捷平文学賞、同年、『半島』で読売文学賞、'09年、詩集『吃水都市』で萩原朔太郎賞、'14年、詩集『afterward』で鮎川信夫賞、'15年、『明治の表象空間』で毎日芸術賞特別賞、'17年、『名誉と恍惚』で谷崎潤一郎賞、Bunkamuraドゥマゴ文学賞を受賞。他に著書多数。'12年、東京大学大学院教授を辞職、執筆に専念する。同年、紫綬褒章受勲。



『名誉と恍惚』
新潮社 2017年



『afterward』
思潮社 2013年



『花腐し』
講談社 2000年



『エッフェル塔試論』
筑摩書房 1995年

2回ぐらい上海に行っている。上海ものの短編やエッセイが幾つかあります。

菅野▼芥川にもありますね。

松浦▼はい、芥川も。横光利一の『上海』は昭和3年に行った体験に基づいていますよね。戦後派が扱った上海と比べると、かなりのんびりしたところがあると思うんです。つまり、谷崎なんかは政治情勢や社会の現実にあまり興味はなくて、もっぱら官能的な話とか。

菅野▼つまり一種の紀行小説ですね。

松浦▼そこに幻想味を加えた『西湖の月』なんかはなかなかいい短編です。ところが武田泰淳とか、堀田善衛の上海体験になると、時代がほんの10年ぐらい下っただけですごく深刻な感じになる。日中戦争の風雲急を告げる時期になっていくわけですね。堀田さんの『上海にて』は、戦後の上海になるわけです。戦中期から彼は上海にいるんですが、戦後の上海での体験を『上海にて』に書いています。僕の小説の舞台は昭和12年から昭和14年なんですけど、手前味噌になりますがこの時期は今まであまり人が手をつけていなかったはずで、昭和12年に盧溝橋事件、第二次上海事変があり、もう戦争が始まっているんだけど租界の中は手をつけられないということで、日本軍はその周りを取り巻いて中は真空状態みたいになっている。そういう状況が昭和12年に始まって、昭和16年になるとパール・ハーバー以降アメリカとの戦争が始まり、日本軍が租界にドツと入ってきて占領してしまします。つまり昭和12年から16年という4年間の上海租界は奇妙な真空地帯みたいに、三すくみのようなかたちでいろいろな権力が渦巻いていて、一方で難民がドツと流入してという状況ですよ。ここは面白いんじゃないかなと思っただけです。上海のことを書くのかなと思っただけいろいろ本を読んでいる中で、租界が『陸の孤島』と呼ばれて孤立していたその4年間を物語の舞台に選んで、そこに日朝混血の警察官というマイナー性を背負った存在を投げ込んでみたかどうか、と。

菅野▼いわゆる十五年戦争の中の小春日和。という言い方はちょっと当たらないかもしれないけど、比較的まあ事の少なかった時期ですね。特に上海の場合、割に落ち着いていたんでしょう。その時期、実は僕の叔父が、保険会社の社員ですけど、上海の駐在員になっていたんです。昭和15、6年かな、4、5年いたんです。その頃、『風と共に去りぬ』を見たそうです。あれは初めての天然色映画でしょう。

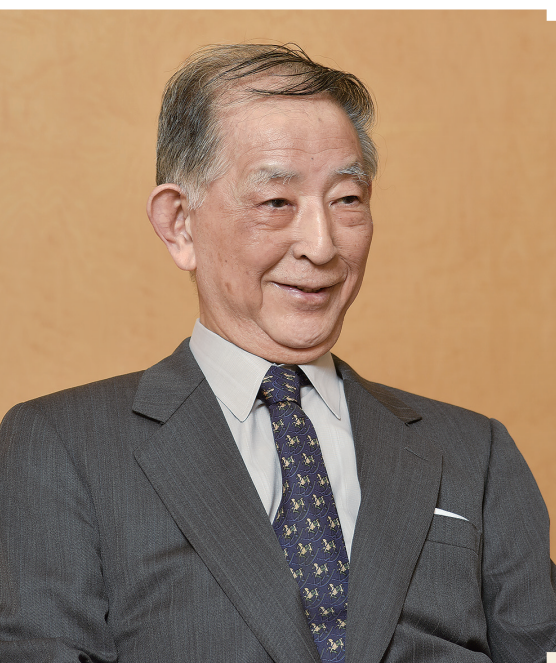
松浦▼それは驚いたでしょうね。

菅野▼びっくりしたと言っていましたね。戦争をしている国であるにもかかわらず、そういうものが見られるような都市なんですね。だから戦後にその話を聞いて、不思議な感じがした覚えがあります。

松浦▼そうですね。ハリウッド映画が入ってきて、ジャズなんかも流行して、ジャズクラブだのナイトクラブはかなり賑やかな活況を呈していた。もともと、1930年代後半になると、上海の繁栄も少し陰りを見せていたと書いている資料もありますけれど。

菅野▼決定的に変わるの、やはり太平洋戦争になつてからでしょうね。

松浦▼一方でちょっと離れた南京では、日本軍が南京攻略をして、南京事件が37年の12月に起きている。そういう中で上海の特に租界、共同租界、フランス租界というのは物語的興味をそそる不思議な場所だったんじゃないかと思ひまして。



議な場所だったんじゃないかと思ひまして。

菅野▼そういう時代を扱った小説というのは、ほかにありますか？

松浦▼例えばSF作家のJ・G・バラードの『太陽の帝国』。日本では堀田善衛が『時間』という南京事件を扱った小説を書いています。断定的なことは言えませんが、上海はあまりないと思います。堀田さんの『時間』は南京事件を中国人の視点から書くという面白い趣向の作品ですが、小説として成功しているかというところかなと。武田泰淳にも幾つか短編がありますね。

菅野▼お二人とも中日文化協会とかいう組織に勤めていたんですね。国内の情勢を逃れてということころもあつたんでしょうね。

松浦▼日本の文学者の中では、武田泰淳が中国との関係では一番深刻な……

菅野▼そうですね。中国文学専攻ですもんね。

松浦▼一番傷ついて、深い懊悩があると思う。そのせいで、かえって上海を舞台にした大きな小説を彼は書けなかった、あるいは書けなかったということじゃないかと思ひます。

菅野▼この『名譽と恍惚』はいつ書き上げられたのですか。

松浦▼月1回ずつ書いて、2年半ぐらい連載しました。今年の3月に出たものです。

菅野▼これから、また小説の予定はありますか。

松浦▼一種のリアリズム小説みたいなものをやってみたので、もう少しイマジネーションで幻想を膨らませたようなものを書いてみたいと思っただけです。

菅野▼それも楽しみに拝見したいと思ひます。

詩について

菅野▼ところで、僕があなたの作品を読んだのは、まず短歌

が最初でした。

松浦▼はい。同人誌のようなものに塚本邦雄まがいの前衛短歌を。短歌の試みはもうあれつぎりになつてしまいました。あれを菅野先生は面白いと言つてくださった。

菅野▼僕が覚えているのは、その後に詩を書かれたでしょう。詩より短歌のほうが君はいいんじゃないなんて、余計なことを言つたもんだから。心外だというような顔をされた(笑)。

松浦▼そうですね。そういう失礼な振る舞いをした記憶はありません(笑)。ただ、詩を書き始めたころは五七五の韻律を何となく敵視している気分というか、気概があつたのは事実です。

菅野▼俳句は作つたことはあるんですか。

松浦▼俳句は一度もないですね。中年以降になつてからやつぱりなかなか面白いものだというか、深いものだという気になつてきましたね。短歌より俳句の方が奥が深いかもしれないですね、結局は。

菅野▼ボンヌフォアが、俳句の本質は瞬間の形而上学だと書いているのを見て、うまいことを言うなと思つたことがあります。短歌というのは、一種の物語性を帯びないと、完結した感じがしないようなところがありますね。それは、歌人とお話ししていても、俳人とお話ししていても、その違いを感じますけど。

松浦▼七・七がつくか、つかないかで大違いで、どこか七・七で調べが出て、歌になつていき、物語の萌芽のようなものはらむことになると思つてもいいんですけど。そこへいくと俳句は本当に一行で屹立して、ものそれ自体をボンと出すだけですから。

菅野▼その通りですね。読むほうが、いろいろそこからイマジネーションを働かせることができる、言語装置ですね。その歌作のあと、『ウサギのダンス』という詩を書かれたわけでしょう。

松浦▼そのころ、先生の『詩の現在』が出て、あれは本当に面白い本で再読、三読したものです。現代詩は北川透さんのお仕事とかいろいろありますけど、どうも批評に恵まれてこなかった。先生

の『詩の現在』は一冊ごとの詩集を徹底的に、かなりの量の言葉を費やして論じられていますよ。

菅野▼僕はああいうふうにしかな書けないから。戦前は分らないけど、戦後は「荒地」グループが制覇したようなところがあつて、言葉二つの分析とか、詩的言語をどういうふうに評価するか、あるいは形式、フォルムのことを重視するということよりも、まず思想なんですね。

松浦▼イデオロギーの話になる。

菅野▼なんだか詩なんか論じないで、政治論文でも論じていたほうがよっぽど実のあることが書けるんじゃないか、と思ったりしたことがありましたけどね。『詩の現在』は、いわゆる詩壇では評判が悪かったですね。

松浦▼そうですか。たしかに『詩の現在』は本当に孤立した仕事というか、ああいうかたちで詩の言葉自体、形式自体を解析しようという批評はその後ほとんどないですね。

菅野▼ただ、『詩の現在』はいわゆる戦後詩のグループの人には評判が悪かったけど、大岡信とか、中村稔さんとか認めてくれる方も一方にはいて、はじめて詩の批評が出てきたとか、そんなふうになつてもらったことがありましたけど。詩はその後ますます、言葉を大事にしない方向に行つてしまった感じがしますね。マチネ・ポエティックの押韻定型詩、あれは日本では無理だということは三好達治が論評したけど、ただ、詩に形式感覚がいかに大事かという問題提起をしたことでもって、歴史的な意味があると思うんですね。だけど、押韻定型詩をそのままというのは、日本語の構造上無理というの、確かに三好さんの言うとおりでだと思いますね。母音の数が少ないのがまず難点ですね。



松浦▼フランス語は鼻母音を入れれば16もあるのに、日本語は5つしかない。

菅野▼同じ行で幾つでも韻ができれば、それが決定的な問題ですね。

松浦▼駄洒落みたいなになっちゃうんですね。

菅野▼ただ、口語自由詩が始まつて以来、詩人たちがそれぞれ詩を書くとき、その度ごとに形式を作らなきゃいけないという、一種の無政府状態がつきまとつてくる。それを何とかきちんと考えていく人が出てこない。松浦さんはそういう難題と取り組んだ人だと思うんだけど。残念ながら詩から離れられた。あなたは才能がありすぎるから。

松浦▼そんな、とんでもないです。

『エッフェル塔試論』

菅野▼そこで次のお尋ねですが、『エッフェル塔試論』と詩はどちらが先だったんですか。

松浦▼同時期ぐらいに書いていました。

菅野▼『エッフェル塔試論』はとも面白く拝見したけど、あれはどういうモチベーションから始まつた仕事ですか。

松浦▼留学してパリの街や日本館で先生にお目にかつたのを思い出しますが、今の日本人はあまり西欧に行つて感動することなくなつてきたのかもしれないが、僕らの世代だとまだ石畳の街の灰色の静かな雰囲気というのがとても深い感銘を受けて嬉しかったんですね、パリで暮らすのも。

今までエッフェル塔というのは絵はがきとか、パリの決まり切つたステレオタイプのイメージの代表みたいなと考えていたので、何となく馬鹿にしていたところがあつたんですけど、実際にパリの街

に身を置いて、セーヌ河岸にあれがそそり立つて見るのを見たときに、ああ、やっぱり美しいフォルムをしているなという素朴な感動があつたんです。紋切り型のイメージとして世間に流布しているエッフェル塔のつまらなさ、平凡さというものと、石の街の背景から実際に300メートルの鉄塔がそそり立つて見るのを見たときの違和感も含めて、これは本当に美しいものだと思いました。それで、歴史的な成り立ちも含めて、あの鉄塔がまつている現代的な「美」の構造を考えてみようとしたんです。エッフェル塔はあまり好きじゃないですか。

菅野▼僕は登つたことないですね。

松浦▼登ると面白いんですよ、エッフェル塔は。あの本の表紙の写真にあるように、真下から見上げると、本当に空洞になつていくわけですよ。中空の空間があつて、4本の柱が周りにあつて、上にずっと狭まつていく。この感じというのが一種のaerialと言いますか、空気の軽やかさをまつた塔なんですよ。

東京タワーは僕が小学生のときに建てられたものですけど、エッフェル塔より高い333メートルというのが自慢だった。東京タワーは真下にビルがあつて、そこから垂直に登るようになっていくのが随分違うなと思ひましたね。エッフェル塔のエレベーターというのは、柱の一つから斜めに上昇していくわけですよ、あれもちょっと遊園地的な身体感覚で楽しいです。

菅野▼エッフェル塔に登つてから書く気持ちが起こつたんですか。あの時期のフランスあるいはパリの建築業界のことなども調べないと、これだけのものは書けなかつただろうと思うけど、ずいぶん時間がかかつたでしょう。

松浦▼そうですね、7年か8年かかりました。エッフェルって面白い人で、エッフェル塔でしかほとんど知られていませんけど、最初は橋の技師だったんですね。ポルトガルとか外国でも橋を架けて回つていて、さらにベトナムにも橋を架けに行つていんだですね。携帯用橋梁というのも変ですが、材料を持つていって、プレハブみたいに即席に架けられ

る橋というのは設計している。

菅野▼植民地時代だからね。もともと軍人ですか。

松浦▼普通のエンジニアです。軍と協力しているというわけでは必ずしもないのですが、結局はフランス帝国主義の手先みたいな仕事をしている。あの時代ですから、そういう政治的な文脈も結構あります。フランス人の研究者はそういうことは全然言いませんね。

菅野▼こういう塔式のものはほかにはないんですか。

松浦▼何しろ橋造りの天才と言われた人でもつばら橋なんです。エッフェル塔は彼にとつて唯一無二のものですね。

菅野▼水平の人が、そのときだけ垂直の技師になつたわけですね。

松浦▼そう。だから、天に架ける橋と呼ばれたり。どこにも通じていない橋ですが。

菅野▼そのエッフェル氏の伝記的なこともいろいろお調べになつた。

松浦▼ええ。オルセー美術館にエッフェル文庫(Fonds Eiffel)という一角がありまして、そこに調べに行かせていただいて。そこで写真を撮つてきたエッフェルのメモも本に入っています。エッフェルの手帳が残つていて、そこに殴り書きみたいな三角形の形が描いてあるんですね。たぶんそれが初めて彼の頭に塔のフォルムというのが浮かんだ……

菅野▼アイデアの始まり。

松浦▼その決定的瞬間だったんでしょう。それを見つけてちよつと感動しました。

菅野▼エッフェル塔は、できた当時はパリであまり評判良くなかつたわけですよ。ヴィリエ・ド・リラダンが悪口を書いているのを読んだことがありますがね。

松浦▼ユイスマンス、モーパッサン等、守旧派の美意識を持つた文人たちですね。

菅野▼そういうのは歴史的に変わらないですね。1977年だったか、ポンピドゥー・センターが開館のときに、デュシャンの大展覧会をやりましたね。僕はその年たまたまフランスに行つたんですね。ちよつと近づいたとき、殺風景な建物、四角い、工

場か何かの格納庫みたいな印象でしたね。

松浦▼あれも当初は異様な感じでした。

菅野▼周囲とマッチしないし、醜悪だなんて思っただけです。あれも世評は芳しくなかったですよね。ところが4、5年経って行ってみると、周りと調和しているんですね。前の広場なんか、整備されてはいないけれども、それなりに人が楽しそうに休憩したりしてね。ああいうのは不思議なものです。

松浦▼不思議ですよ。その後はルーブル宮の正面玄関のピラミッドですよ。

菅野▼それから第二凱旋門も、はじめは何となく違和感があったけど、しばらくすると、整然と調和がとれてくる。ああいうところはフランス人は上手ですね。

松浦▼テットデファンヌです。大胆なものを打ち出すんだけど、最終的には違和感も含めて、ある美しい景観になつていく、調和していくという。

菅野▼立派にできあがっているですね。ピブリオテーク・ナショナル(フランス国立図書館)でもそうです。

松浦▼ドミニク・ペロー設計の、4本の柱を建てたトルビアク地区の新館ですね。僕はあまり利用はしたことがないんですけど。ただ、ガラス張りにしちゃったので、直射日光で本が傷むから後で巨額の追加予算をかけてブラインドを作ったり、とんちんかんなことがあったらしいですけどね。

文学批評の方法について

菅野▼いきなりこういう質問をするのもなんだけど、構造主義以後というか、要するにロラン・バル

ト以後でもいいんですけど、ああいう新しい文学研究、あるいは文学批評の方法についてどう思いますか。

松浦▼バルトとかリシャールは名文家で、彼ら自身一種の文人みたいな人たちですよ。そういうエリガントな文体と繊細な感性と鋭利で独創的な思考があればこそ、テクスト論と言いますか、言葉の構造とフォルムだけを徹底的に追っていつて、文学の本質を見出すというのも成り立つたわけでしょう。しかし誰もがそういう名文家ではないので、どうもヌーベル・クリティックの亜流というのは華々しい成果はなかったし、今はほとんど消えてしまったような気がします。



菅野▼僕は問題を二つ感じてきました、一つはいわゆるヌーベル・クリティ

ック全般、構造主義批評、あるいは、生成批評などもふくめて、受容の仕方の問題ですね。あれは、要するにフランス、あるいはヨーロッパ文学を相手にして作られた方法論ですね。それを無媒介に日本の作品に適用するということは、無理があるんじゃないか。その方法を基にして日本の文学と具体的に対応させて、変奏してやっていくということはできるだろうかと思うんですけど、直輸入ではすつきり適用できないとしたか考えようがない。

もう一つは、バルトの有名な「作者の死」。あれは結局、レクチュール『証言・伝説』(絶版)読むと、読書の理論だと思うんです。ずっと昔になりますけど、アンドレ・ジッドが「創造の魔神」ということを言ったことがあります。つまり、作家が、俺はこういう小説を書いたよと言っても、作家の予期しないところで、意識しない面で、別の魅力が

生じて、別の思いがけない小説の世界ができあがる。それが本当の小説だというのがジッドの考えですね。

「作者の死」というのも、作者の実生活や社会的事実に戻元したりして読むのでなく、言語によつて組み立てられた世界を読者は読まなければいけない。それはそれで立派なレクチュールの理論だと思うんですね。フーコーがそれに一種の反論をして、バルトの「作者の死」は認めているんだけど、その前に作者の行為という問題があるのじゃないかという意味のことを書いていますね。それが両面相俟って、一つの作品を把握する道筋ができると思うんですね。ところが日本では一人歩きしちゃって、作家はいないかの如き批評を時々見かけますけど、そのへんの機微をもう少し考えたほうがいいんじゃないかなという気がします。

松浦▼ヌーベル・クリティックが敵視していた、彼らがランソン流の文学史とよく軽蔑して呼んでいた、そういう旧来の文学研究においてテクストの構造とかフォルムが無視される傾向があったということは、まあ事実なんじゃないかな。

菅野▼19世紀以来の実証主義的な研究や批評だけでは、テクストをきちんと読めないということでは、もちろんはつきりしていることなんです。

松浦▼でも逆に、テクストの構造とフォルムだけ取り出せばいいかというと、やっぱり人間の行為として文学というのはあるわけですから。バルト自身、晩年は小説こそ書かなかったけれど、最後の写真論の『明るい部屋』なんてほとんど私小説みたいなものです。バルトは文章も素晴らしいけれど、彼自身もとても面白い人ですね。今、ブルーストと並ぶような20世紀の大作家扱いで、評論や研究がいっぱい出ています。この間、久しぶりにフランスに行つて驚いたんですけど、本屋に大きなバルトコーナーがあつて。

菅野▼テクストの領域を開拓した大きな功労者であるわけですからね。やつぱり、ジッドの創造の魔神論なんかにつながるところもあると思うんです。バルトはジッドの、特に『地上の糧』なんか

をよく読んでいたでしょう。僕はバルトに二回ぐらい日本語を教える羽目になったんですよ。

松浦▼えっ、バルトに。『表徴の帝国』を書くために日本にも何度も来ていたらしいですね。

菅野▼67年か68年に、森有正先生に言われて。日本語と言つても文法を教えるんじゃないかと、もつと日本語の構造とか高級なことだと思ふんです。そんなことできないから駄目ですと言つたら、いやいや、行けば勉強になるよと。アバルトマンに二度ぐらい行つたんですよ。その後、ピレネーのほうへ旅行するとかで、僕も日本へ帰らなきゃいけなくてそれっきりになりましたけど。その後、しばらくしてコレージュ・ド・フランスに入つて、それから自動車事故で亡くなったんですよ。

松浦▼いろいろお話できて今日は本当に楽しかったです。

菅野▼これから小説一筋と言わず、昔を思い出して、詩でもエッセイでも面白いものを読ませてください。

松浦▼頑張つてみようと思います。

菅野▼「名譽と恍惚」は大きな社会的な、あるいは政治的な問題まで、領域が広いですよ。ところが、当今の小説はおしなべて収縮の方向に陥っているんじゃないですか。

松浦▼シュリンクしていますよ。

菅野▼そこが一番問題だと思うんですけどね。しかし、松浦さんは今、脂が乗り切ったところにいる。

松浦▼いやいや、もう駄目です(笑)。

菅野▼この「名譽と恍惚」を読んで、まだまだ最後の頂点まではたどり着いていないかなと思つたりしました。俗っぽい譬えで恐縮ですけど、プロ野球の選手なんかはまだ伸びしろがある、という言い方をしますが、それですね。脂はもつと乗る余地がある。『半島』に比べても格段に小説世界が広がって、充実しているということを率直に申し上げ、これをまた一つの飛躍台にして、大作を期待します。

松浦▼ありがとうございます。

「2017年10月13日 世田谷文学館館長室にて」

〈日本SFの父〉 海野十三が設計した 「秘密の書齋」

(「新青年」1938年12月号)



海野十三

のジャンルを開拓し、ロボットやロケット、宇宙船、タイムマシン、人工臓器、近未来戦争、宇宙戦争など多様な素材やアイデアを、豊かな想像力と科学者としての知見に基づくリアルな筆致で描き出しています。

「秘密の書齋」設計図は、そんな海野の作家的想像力が凝縮したものです。空からの脅威への防衛意識も顕著にうかがわれます。海野は、満州事変から日中戦争へと日本が中国やアジア諸国への侵出を拡大する中で、空襲の脅威を作品に繰り返し描きました。太平洋戦争の始まる11カ月前の1941年1月には、世田谷区若林の自宅裏に千円の費用を投じて防空壕を作っています。

見開きページいっぱい要塞らしき建物の断面図。2台のロケットとドリル式的地中車、物資補給用の地下列車も描きこまれています。小高い丘の上部に見える「わが書齋」は煙突状のビルの中を上下し、非常時には地中に隠れ、鋼鉄合金製の掩蓋や磁力砲に護られるというもの。樹に見せかけた探知機も配置されています。プライベート用の部屋は16室、海水を利用した自家発電や飲料用の濾過装置まで備えています。

空からの脅威に備えて

「秘密の書齋」と題されたこの設計図は1938年、雑誌「新青年」12月号に掲載されました。設計・製図は海野十三(うんの・じゅうざ)1897~1949)。(日本SFの父)とも呼ばれる海野は戦前から戦後にかけて数々の空想科学小説を書き、絶大な人気を博していました。手塚治虫や小松左京ら、後にSF第一世代となる作家たちは、子ども時代はみな海野の愛読者だったのです。

海野は通信省電気試験所で当時の最先端技術であった真空管の研究開発に取り組む科学技術者でした。1928年、「電気風呂の怪死事件」を「新青年」に発表、科学トリックを駆使する異色の探偵作家として知られるようになります。作家専業となつて後は、少年向けの科学冒険小説

「科学恐怖の夢」

太平洋戦争末期の1944年11月以降、東京は海野の予想どおりアメリカ軍による無差別爆撃にさらされることになりました。

二週間ほど前より、帝都もかねて覚悟していたとおり「空襲される都」となった。(中略)これからさらに空襲は激化して行くであろう。そこで特に、この「空襲都日記」をこしらえ、後日の用のため、記録をとっておくことにした。

「空襲都日記」(一)

度重なる爆撃で世田谷も多くの被害を受けましたが、海野夫妻と4人の子どもたちは無事でした。日記の記述「偶然焼け残ったというところはない。懸命の努力で消火したればこそ焼け残ったのである」とは、日々の防空活動から得た実感だったことでしょう。

1945年8月、広島に原子爆弾が投下され甚大な被害を受けたとのニュースが入ります。敗戦を確信した海野は衝撃と喪失感から一家心中を決意しますが、かろうじて思いとどまります。大晦日、彼は日記の終わりにこう書きつけました。

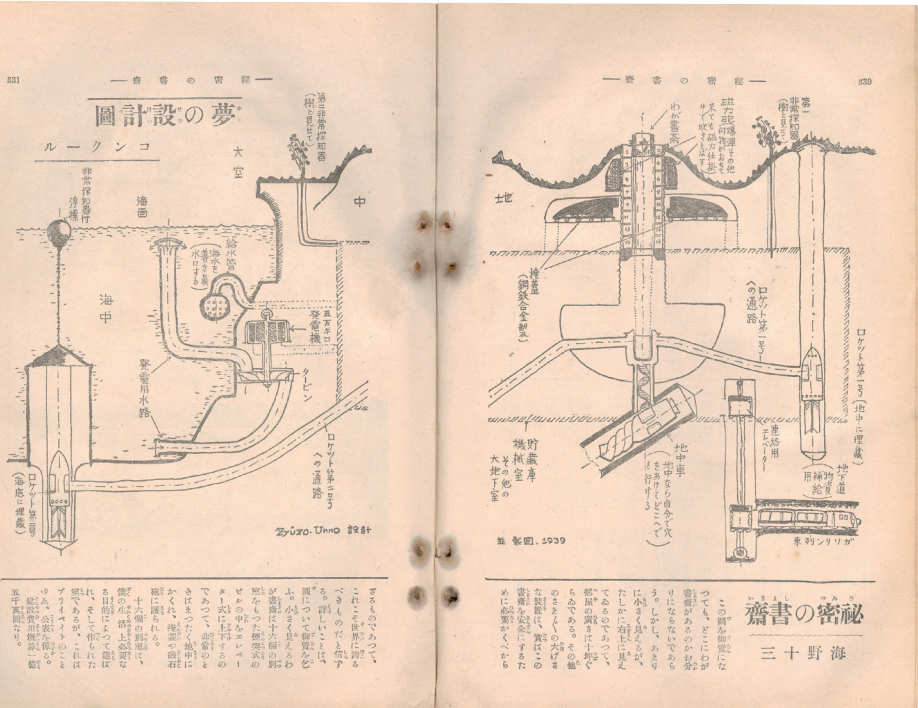
ああ昭和二〇年！ 凶悪な年なりき。言語道断、死中に活を拾い、世中に死に追われ、幾度か転々。さりながら、わが途は定まり。生命ある限りは、科学技術の普及と科学小説の振興に最後の努力を払わん。

「降伏日記」(一)

生きて創作に邁進することを選択した海野ですが、皮肉なことにたびたび咯血に苦しめられるようになっていました。戦争中海軍の報道班員として派遣されたラバウルで再発した肺結核が進行し、1949年5月17日に急逝します。まだ51歳の若さでした。没後海野の故郷徳島市の徳島公園に建てられた文学碑には代表作「地球盗難」(1937年)から、次のように刻まれています。

全人類は科学の恩恵に浴しつつも、同時にまた科学恐怖の夢に脅かされている。恩恵と迫害との二つの面を持つ

海野十三「秘密の書齋」(「新青年」1938年3月号) 海野と交友が深く、同誌の編集長も務めた横溝正史が所蔵していた



科学、神と悪魔の反対面を兼ね備えている科学に、われわれはとりつかれている。かくのごとき科学時代に科学小説がなくていいであろうか。

科学者であつたからこそ、海野は科学のもたらす深淵を見つめることができたでしょう。現代に生きる私たちもまた深刻な「科学恐怖の夢」に脅かされています。言葉の重みを改めて感じずにはいられません。

海野十三「秘密の書齋」と関連資料はコレクション展「SF・再始動」でご紹介しています。亡くなる当日に書かれた盟友・横溝正史宛の書簡もあわせて展示しています。ぜひご覧ください。

齋書の密秘
三十野海

資料受贈報告

▼青木徹様 清水久夫様 高橋純子様 漢夢道様 堀川博史様 三谷卓様 峰岸了子様
▼青森県近代文学館 射水市大島絵本館 浦安市郷土博物館 江戸東京博物館 大阪大学近代文学研究会 小田原

城総合管理事務所 神奈川近代文学館 紙の博物館 川端康成文学館 菊池寛記念館 北九州市立松本清張記念館 現代文学史研究会 国文学研究資料館 さいたま文学館 作品社 佐佐木信綱研究会 抒情文芸刊行会 高遠書房 館林市教育委員会 田原市博物館 鶴書院 東京都教育

庁地域教育支援部 徳島県立文学書道館 中原中也記念館 沼津牧水会 ふくやま文学館 文京ふるさと歴史館 前橋文学館 山梨県立文学館 山梨大学 やまなし文学賞 実行委員会 与謝野晶子倶楽部

▼「海」「風」「かねこと」「空想カフエ」「くさくさ」「九品仏川柳会句会報」「原型富山」「鴻」「心の花」「山暦」「春耕」「正午」「詩霊」「川柳研究」「蠶」「短歌人」「地中海」「白」「羽鳥通信」「ブチ★モンド」「文藝軌道」「本のPacking」「窓」「ゆく春」「ランブル」「りんごの木」 (五十音順 団体名敬称略)

2017年6月22日～10月24日

2017(平成29)年度コレクション展 後期

SF・再始動

2017年10月7日(土)～
2018年4月8日(日)

2017年度コレクション展 後期は、「SF」がテーマです。

『月世界探検記』で世田谷にロケット基地を出現させた日本SFの父・海野十三はじめ、世田谷文学館には日本SFの歴史を物語るコレクションがあります。本展では、海野十三の著作や直筆資料、特撮映画「ゴジラ」シリーズの台本、SF作家・豊田有恒氏旧蔵の日本SF黎明期を担った仲間たちの書籍、子どもたちに夢を与えた懐かしいジュブナイルSFなど、魅力あふれる収蔵資料の数々をご紹介します。

SFとはなにか？

そう。それをきめるのは、きみ自身だ！

あるいは、いつまでたつても、答えがきまらないかもしれない。

それなら、いつまでも、答えをさがし続けていけばいいのである。

筒井康隆「SFについて」
『SF教室』ポプラ社1971年より

「SF」は読む人それぞれの、かけがえのない体験とともにあります。そして同時に、時代を超えて共有する物語もあります。本展で展示している作品の中に、あなたの本棚と同じ1冊があるかもしれません。

この機会にぜひ世田谷文学館の本棚をご覧ください。物語を共有していただければ幸いです。



筒井康隆『SF教室』の言葉に誘われて



「私がはじめて会った火星人は、われわれ世代の大部分がそうであるように、やはり、海野十三の小説だろうとおもう。」(野田昌宏『SF考古学』北冬書房1974年)



特撮映画「ゴジラ・エビラ・モスラ 南海の大決闘」(1966年 東宝・福田純監督)の台本も展示

展覧会のご案内

世田谷区内在住の書家による
第36回 世田谷の書展
世田谷ゆかりの作家たち

2018年1月4日(木)～14日(日)
世田谷文学館 1階文学サロン

世田谷区内在住の、現代書壇で活躍する書家が、会派を超えて「世田谷ゆかりの作家たち」をテーマにした新作を一堂に披露します。

観覧料 無料

関連催事・鑑賞講座

「書」の豊かな楽しみ方を探してみませんか。出品書家と鑑賞しながら、見どころや作品をわかりやすく解説します。書をこれから始めてみたいという初心者の方どうぞご参加ください。

1月10日(水) 講師 稲村龍谷(日展会友)

12日(金) 講師 田中栄子(読売書法会理事)

13日(土) 講師 荒谷大丘(毎日書道展審査員)

*申し込み不要です。
各日とも14時～15時、当日会場へお越し下さい。



第35回「世田谷の書展」展示風景



鑑賞講座

ミロコマチコ いきものたちの 音がきこえる

2018年1月20日(土)～4月8日(日)



ミロコマチコ

1981年、大阪府生まれ。画家・絵本作家。
いきものの姿を伸びやかに描き、国内外で個展を開催。
2012年に出版した最初の絵本『オオカミがとぶひ』で日本
絵本賞大賞を受賞。2作目の『ぼくのふとんは うみででき
ている』で小学館児童出版文化賞、3作目の『てつぞうは
ね』で講談社出版文化賞絵本賞を受賞。2015年、『オレ
ときいろ』でブラティスラヴァ世界絵本原画展(BIB)金のり
んご賞、2017年、『けもののおいがしてきたぞ』で同展金
牌を受賞。近作の絵本に『まっくらやみのまっくら』など。

絵本作家としてのデビュー作『オオカミがとぶひ』(2012年)が、日本絵本賞の大賞に輝いたミロコマチコ。その類いまれな色彩感覚と独自の造形表現、豊かな言語感覚によって生み出される作品は、国内外の名だたる絵本賞を受賞してきました。

本展では、大
型作品を含む絵
画や立体、代表
作の絵本原画な
ど、150点以
上の作品に最新
作を加えて構成
し、画家として、
絵本作家として、
日々創作を
つづけるミロコマ
チコの、今を
切り取ります。
ダイナミックな、
ライブ感あふれ
る展示をお楽し
みください。



《ホッキョクグマ》2015年



《ムラサキウミアシカ(イロイロどうぶつ図鑑)》2015年



《飛び方》2011年



《グランドガゼルもまってる》2010年

2018年最初の展覧会は、いきものたちがうごめきます。

関連イベント

[会場] ①～③ 1階文学サロン / ④～⑤ 1階ロビー

① いきものの音がきこえる ワークショップ

2月3日(土) 14時～15時30分

いきものからどんな音がきこえてくるだろう？

ツノがはえる音？ 血が流れる音？ みんなで作ってきいてみよう。

＊汚れても良い服装で来てください。

[出演] ミロコマチコ、中ムラサトコ(ボイスパフォーマー)

[対象] 小学生

[参加費] 無料

[定員] 20名

[申込締切] 1月20日(必着)



平成29年度文化庁地域の核となる
美術館・歴史博物館支援事業

② はえろはえろ いきものの毛 ワークショップ

2月10日(土) 14時～15時30分

大きなはだかのいきもの。なんだか寒そう。どんな毛がはえてくるだろう？ 毛糸を使ってみんなで毛をはやしてあげよう。

[出演] ミロコマチコ、三國万里子(ニットデザイナー)

[対象] 小学生

[参加費] 無料

[定員] 20名

[申込締切] 1月27日(必着)



平成29年度文化庁地域の核となる
美術館・歴史博物館支援事業

①と②のイベントは、各締切日までに往復ハガキ(1イベントにつき1枚)に、1. イベント名、2. 参加者名・年齢(3名まで連名可)、3. 代表者の住所・電話番号を明記のうえ、世田谷文学館「ミロコマチコ展」係へお申し込みください。返信用にも代表者の住所・氏名をご記入ください。応募者多数の場合は抽選となります。結果は締切後、返信ハガキでお知らせします。

③ ライブペインティング

3月24日(土) 18時～19時30分

音楽家 haruka nakamura のピアノ演奏と、ライブペインティングのセッションです。

(参加ミュージシャンはHP等で告知します)

[出演] ミロコマチコ、haruka nakamura (音楽家)

[料金] 2,000円(中学生以下無料)

[定員] 150名

[チケット] チケットは完全前売制です。1月20日よりローソンチケットで販売します。(全国ローソン・ミニストップ / TEL.0570-000-777 / Lコード: 36505)。

＊小中学生もチケットの発券が必要です。別途発券手数料等がかかります。当館では購入・発券できませんのでご注意ください。

④ ミロコマチコ サイン会

2月3日(土)、10日(土) 16時～

当日10時から、ショップで図録、書籍をお買い求めのお客様に整理券をお渡しします。

＊整理券は商品1点につき1枚、お1人2枚まで。

＊規定枚数に達し次第配布終了します。

⑤ 古書トムズボックス

3月3日(土)、4日(土) 11時～17時

絵本編集者の土井章史さんが、これまで買い集めてきた本を特別に販売する、2日間限定のポップアップストアです。



《おやすみ、トナカイ》2015年、ライブペイント、アルフレックスジャパン蔵



《ご飯を待つ4匹》2016年

観覧料:

一般800(640)円、65歳以上・高校・大学生600(480)円、
障害者手帳をお持ちの方400(320)円

＊()内は20名以上の団体料金 ＊中学生以下無料 ＊1月26日(金)は65歳以上無料

主催＝公益財団法人せたがや文化財団 世田谷文学館、毎日新聞社

協力＝アルフレックスジャパン、あかね書房、イースト・プレス、岩崎書店、WAVE出版、
学研プラス、小学館、プロンズ新社

後援＝世田谷区、世田谷区教育委員会



『オレときいろ』(絵本原画) 2014年

「セタブンマーケット 2017」開催報告

9月16日、17日の2日間にわたり、本と雑貨の蚤の市「セタブンマーケット」を開催しました。

3回目となる今年のテーマは「アウトドア」。

開催中の企画展「山へ! to the mountains」と連動し、古書店・雑貨店・飲食店のほか、アウトドア関連のお店にもご出店いただきました。



恒例の作家・デザイナー・編集者からの特別出品コーナーでは、1日目は漫画家・作家のしまおまほさん、編集者の鈴木芳雄さん、2日目は写真家の石川直樹さんに店主としてご登場いただきました。

また、イラストレーターの寺本愛さんによるワークショップ、ライブラリーへほんとうでのdidoさんによる絵本の読み聞かせと工作など、関連イベントも大好評でした。





イラストレーター・寺本愛さんに、1日目はぬり絵のワークショップ、2日目は参加者の「(仮想)登山記念画」を描くドローイングイベントをしていただきました

開催日時

2017年9月16日(土) 10時～18時、17日(日) 10時～17時

会場

世田谷文学館 1階文学サロンほか

出店・出品者一覧(敬称略)

[古本]

古書明日 / 古書 山へ! (suiran & へちま文庫 & book pick orchestra) / BIBLIOPHILIC & bookunion 新宿 / books moblo / 文紀堂書店 / ほん吉

[雑貨]

amco culture & journey / OLD NEW THING / ミャオ族の刺繍と暮らし店

[アウトドア]

OUTDOOR GEAR ZINE / Purveyors / HIGASHI ALPS

[フード]

puer / Bear Pond Espresso / 喫茶どんぐり

[ワークショップ]

寺本愛 / ネイチャーコラージュ / pipio (武本佳奈絵 & 平澤朋子)

[特別出品]

石川直樹 / 角田光代 / クラフト・エヴィング商会 / 坂本眞一 / 椎名誠 / しまおほ / 鈴木芳雄 / 祖父江慎 / タペイ企画 / 火野文子 / 藤原えりみ / 星ライブラリ / 夢枕獏 / 吉本ばなな



子どもたちに大人気のワークショップ「ネイチャーコラージュ」自然の素材を使ってコラージュづくりを楽しみました



ライブラリー〈ほんとう〉ではpipioさんによる絵本の読み聞かせと工作のイベント「やまのぼりだいさくせん」を行いました(1日目)



「山へ!」展の出品作家である写真家・石川直樹さんに店主をつとめていただきました(2日目)



『てっぺん 我が妻・田部井淳子の生き方』(宝島社)を上梓された田部井政伸さんによるトークイベントを行いました(2日目)

台風による悪天候の中、2日間で合計2935名の多くのお客様にご来場いただきました。

このセタブンマーケットは、当館が資料の収集・保管・展示という従来の博物館機能のみならず、本や作家との新たな出会いの場、文学を介した交流の場としても機能することを目的に始めた新たな試みです。当館が地域に欠かれない魅力的な広場となるよう、ご来場者や出店者からのご意見を参考に、今後もこのような試みを推進してまいります。

企画展

第36回 世田谷の書展
世田谷ゆかりの作家たち

2018年1月4日(木)～1月14日(日)

1階文学サロン 観覧料:無料



ミロコマチコ
いきものたちの音がきこえる

2018年1月20日(土)～4月8日(日)

2階展示室

観覧料:

一般 800(640)円

65歳以上・高校・大学生 600(480)円

障害者手帳をお持ちの方 400(320)円

*中学生以下無料

*()内は20名以上の団体割引

*1月26日(金)は65歳以上無料

ミロコマチコ
《パンを食べるミケ》
2016年



企画展		ミロコマチコ いきものたちの音がきこえる	
第36回 世田谷の書展 世田谷ゆかりの作家たち 2018年1月4日(木)～14日(日)		2018年1月20日(土)～4月8日(日)	
12月	2018年1月	2月	3月
コレクション展 SF・再始動 ～2018年4月8日(日)まで			

コレクション展

SF・再始動
～2018年4月8日(日)まで
1階展示室



観覧料:

一般200(160)円 高校・大学生150(120)円

小・中学生、65歳以上・障害者手帳をお持ちの方100(80)円
*()内は20名以上の団体料金 *土・日・祝日は小・中学生無料

開館時間:10時～18時(展覧会入場は17時30分まで)

休館日:毎週月曜日(ただし月曜日が休日の場合には開館し、翌日休館)



交通案内:京王線「芦花公園」駅南口より徒歩5分
小田急線「千歳船橋」駅より京王バス(千歳鳥山駅行)利用
「芦花恒春園」下車徒歩5分

公益財団法人せたがや文化財団

世田谷文学館 SETAGAYA LITERARY MUSEUM

〒157-0062 東京都世田谷区南島山1-10-10

Tel. 03-5374-9111 Fax. 03-5374-9120

ホームページ <http://www.setabun.or.jp/>

せたがや文化財団の催し物

■世田谷美術館 [Tel. 03-3415-6011]

●ボストン美術館 パリジェンヌ展
時代を映す女性たち

2018年1月13日(土)～4月1日(日)



ジョン・シンガー・サージェント
《チャールズ・E. インチズ夫人(ルイズ・ボメロイ)》1887年
Anonymous gift in memory of Mrs. Charles Inches' daughter, Louise Brimmer Inches Seton 1891.926
Photograph ©Museum of Fine Arts, Boston

■世田谷美術館分館

向井潤吉アトリエ館

[Tel. 03-5450-9581]

●向井潤吉1970's-1980's 民家集大成
12月16日(土)～2018年3月18日(日)

■世田谷美術館分館

清川泰次記念ギャラリー

[Tel. 03-3416-1202]

●清川泰次 平面と立体
12月16日(土)～2018年3月18日(日)

■世田谷美術館分館

宮本三郎記念美術館

[Tel. 03-5483-3836]

●第4回 宮本三郎記念デッサン大賞展
「明日の表現を拓く」
12月16日(土)～2018年3月18日(日)

■世田谷文化生活情報センター

世田谷パブリックシアター

[Tel. 03-5432-1526]

●こまつ座&世田谷パブリックシアター
『シャンハイムーン』

2018年2月18日(日)～3月11日(日)

会場:世田谷パブリックシアター

作:井上ひさし

演出:栗山民也

出演:野村萬斎

広末涼子

鷲尾真知子

土屋佑壺

山崎 一

辻 萬長

●『岸 リタル』

2018年2月20日(火)

～3月11日(日)

会場:シアターラム

作:ワジディ・ムワド

翻訳:藤井慎太郎

演出:上村聡史

出演:岡本健一 亀田佳明 大谷亮介

中嶋朋子 ほか



■世田谷文化生活情報センター

生活工房

[Tel. 03-5432-1543]

●眞田岳彦ディレクション/

衣服・祝いのカタチ vol.2

赤をめぐる旅 展

— 祝いの水引結び

12月20日(水)～

2018年2月4日(日)

会場:生活工房ギャラリー

ワークショップルーム A・B

●みつける365日展

2018年2月24日(土)～3月18日(日)

会場:生活工房ギャラリー、

ワークショップルーム A・B

■世田谷文化生活情報センター

音楽事業部 [Tel. 03-5432-1535]

●せたがや名曲コンサート「ラ・ボエーム」

2018年2月4日(日) 14時

会場:昭和女子大学人見記念講堂

演出:青木真緒 出演:新通英洋(指揮)

ソリスト:高橋絵里 村上公太 ほか

世田谷フィルハーモニー管弦楽団

世田谷区民合唱団 えびな少年少女合唱団 ほか

